

鈴木敏恵 COC+講演資料

第5回 千葉県COC+合同シンポジウム・ポスターセッション

地域と学生が共に成長する プロジェクト学習

地域・自治体・大学の協働

日時 2018
10/16 火

13:30 - 17:00 (13:00 - 受付)

会場 千葉大学西千葉キャンパスけやき会館
1階大ホール・ロビー

13:30 - 13:35 開会挨拶 徳久 剛史 (千葉大学 学長)

13:35 - 14:35 基調講演 **プロジェクト学習で
"価値を創造できる人" になろう!**
「ポートフォリオ」に学生は知を地域の人にはリアルを..

鈴木 敏恵 (シンクタンク未来教育ビジョン代表)

【プロフィール】一級建築士・未来教育クリエイター。次世代プロジェクト学習、ポートフォリオの第一人者として全国で活躍。公職歴：内閣府中央防災会議専門委員、千葉大学教育学部特命教授、東北大学非常勤講師ほか。『日本計画行政学会賞』特別賞受賞。著作『AI時代の教育と評価』他多数

■ 千葉COC+地域再生・創生人材育成プロジェクトとは

1、次世代プロジェクト学習の手法による『千葉COC+地域再生・創生人材育成』

文化的、経済的、歴史的背景のことなる地域が共通するコンセプトの元に広域的に展開する「千葉COC+」においては、関わる人々（学生、自治体、地域の当事者など）は、どういう立ち位置でどこへ向かって行くのかが可視化・顕在化できることが欠かせません。

各自治体には優れたアイデアや戦略がありますのでバラバラに各々の進め方で展開するのではなく、そのプロセスで派生する課題や課題解決などを互いに共有することで、さらに効果的で価値ある知の触発、創発が叶います。そのために共通プラットフォームとして、次世代プロジェクト学習の手法で『千葉COC+地域再生・創生人材育成』を展開することを提案します。

2、学び成長する地域

次世代プロジェクト学習の手法で進捗することで、共通プラットフォームで展開することで、知恵を共有しあって、「学び成長する地域」として全体性で進化することができる。大学の地域再生・創生カリキュラムとしても明確な教育目標を掲げ向かうことができる。全ての地域において、普遍的な「地域創生コンピテンシー」を学生も地域も身につけることができる。次世代プロジェクト学習の手法で進捗することで、学生たちに身につく力の確実性を叶えるだけでなく、その評価を根拠を持ってできる。

3、プロジェクトのゴール=他者に役立つ知のアウトカム

次世代プロジェクト学習の最大の特徴は、そのゴールを「他者に役立つ知のアウトカム（成果物）」を創造的に生み出すことにあります。

* プロジェクトには様々な立場、所属、キャリア、個性、スキルを持つ人が参加しますが、皆 ビジョンとゴールを共通認識とします。

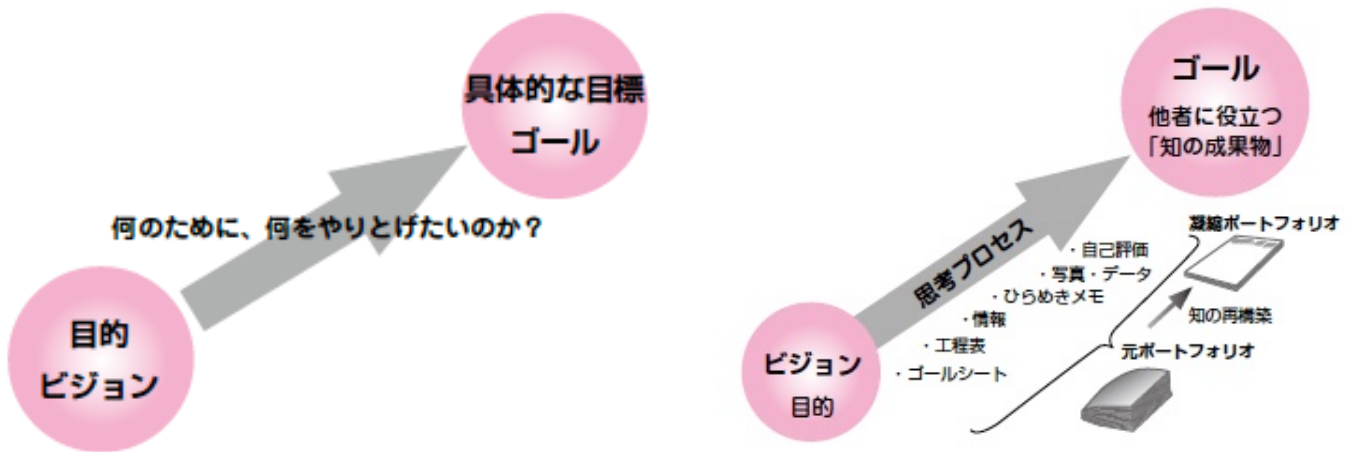
プロジェクトチーム（船）でゴールへ

地域再生・地域創生..共通する仕事や課題意識の人々で船（チーム）をつくり、それぞれ知識や課題解決のアイデアを創造的に出し合い、船をゴールへ到達させます。

□ 未来教育プロジェクト学習とは

プロジェクト学習は、学習者自身が課題を見出し課題解決をしてゴールへ向かうものです。「何のために、何をやりとげたいのか」を明確にして具体的な目標（ゴール）へ向かうプロセスで課題解決力を身につける次世代型の学習手法です。このプロジェクト学習の最大の特徴は、学習のゴールに他者に役立つ「知の成果物」を生み上げることにあります。ポートフォリオで目標への軌跡を一元化しながら進めます。

次世代プロジェクト学習



ポートフォリオは、ゴールに向かうプロセスで得られた情報やひらめいたアイデアやメモなどを一元化したものです。ポートフォリオには最初のページに目標を書いた「ゴールシート」を入れ、その続きから時系列に中身を入れていくので、それをめくることで目標へ向かい課題解決のプロセスを追うことができます。最後に元ポートフォリオを再構築して「凝縮ポートフォリオ」、提案集や地域活性化提案集などを創り出します。

★ 次世代プロジェクト学習＝ソーシャル・ソリューション ★

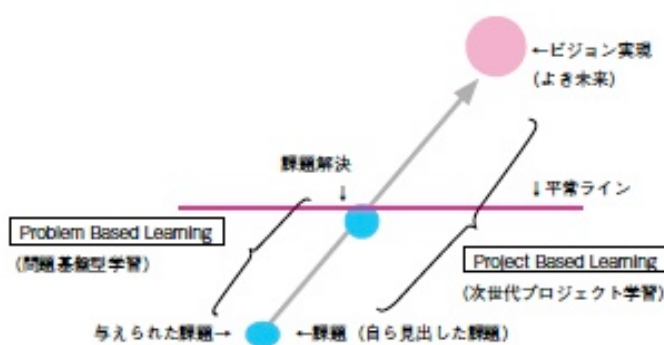


図2-7

次世代プロジェクト学習

ビジョンの実現へ向かうことは平常ライン（＝問題を解決した状態）へ向かうよりずっと前向きなものに学習者の心を変えます。意志を持ってビジョンの実現へ向かうほうが、資質や能力も伸びやかに発揮させ成長すると言えるでしょう。

Problem Based Learning

学生は与えられた課題を動機付けとして学習する。〔PBL Problem-based Learning 判断能力を高める主体的学習〕（医学書院）より抜粋。

次世代型 Project Based Learning

意志ある学びを理念としプロジェクト手法による学習手法。

目的（ビジョン）と目標（ゴール）を明確にして自ら目標へ向かう学習。目の前の現実から課題発見をする力、全体を俯瞰する力など AI 時代に必要な力が身につく。筆者が構想設計。全国の教育界、医学界などプロフェッショナル教育に拡がっている。

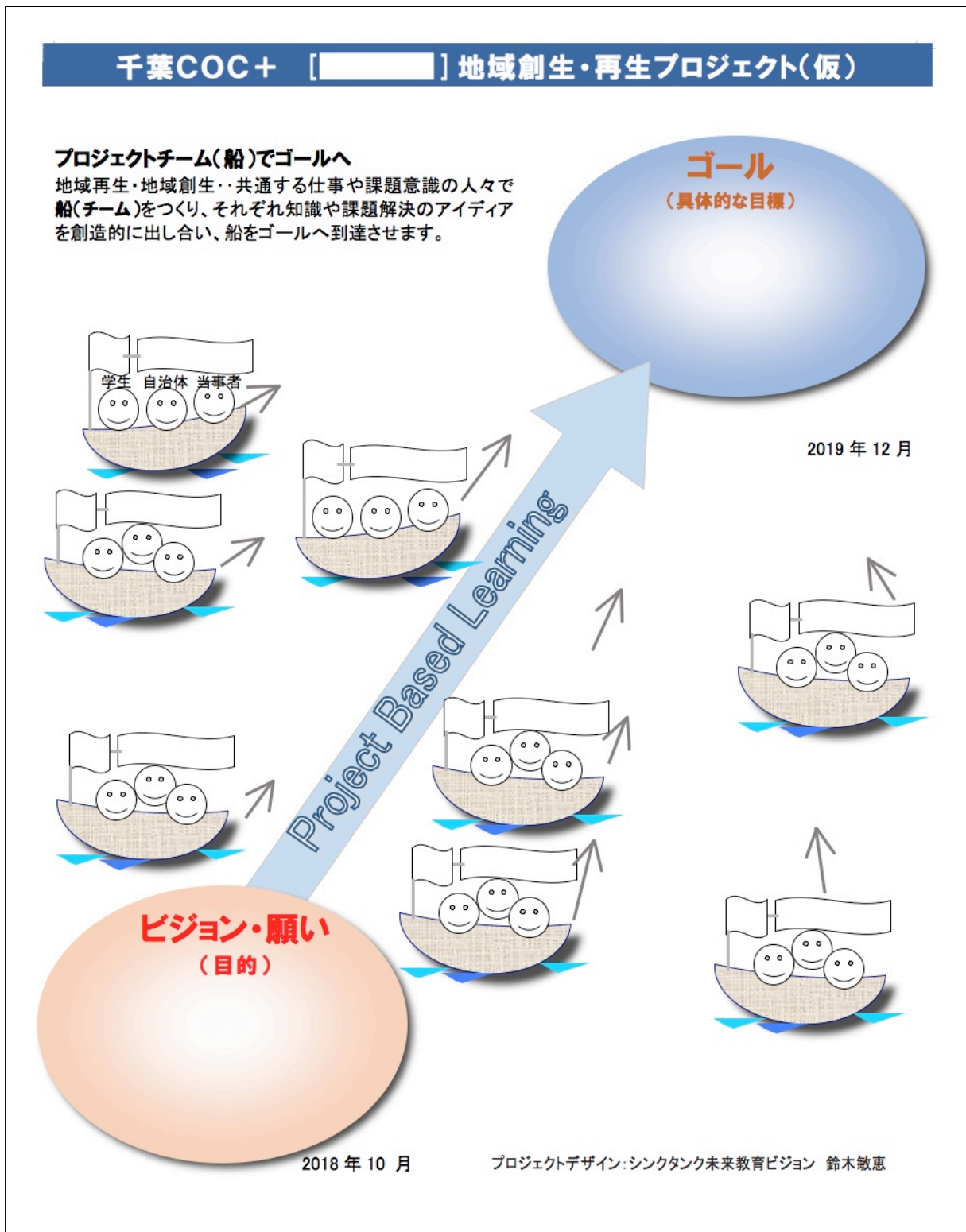
[PBL航海図—総合]

- 1、各自治体プロジェクトは、共通して上位のビジョンゴールへ航海します。
- 2、ゴールへのプロセスで、マイルストーンごとに戦略的に知を共有します。



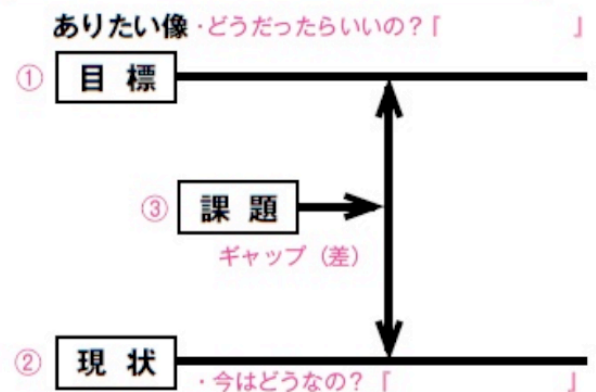
[PBL航海図—地域]

3、船の乗組員には必ず、「学生」「自治体職員」「地域の当事者」の3者で構成します。



4、プロジェクトの共通理念としてのSDGs

それぞれの地域における課題解決へ向かう際、そのビジョン・ゴールの指針としてSDGsの精神を共通の方向性として活かします。



”千葉県”全体へSDGs導入の起爆剤となり得る

千葉COC+ 地域再生・創生人材育成プロジェクトの共通理念にSDGsを掲げることで千葉県全体でSDGsへ一気に向かう有効なきっかけ、事業化スタートアップになる

ポイント① このことがまた、「千葉COC+ 地域再生・創生人材育成プロジェクト」の航海への乗組員を増やすことになる。

ポイント② 各自治体（市町村、県など）相互や個々の部署を横断的に関係付けることにも機能する。このことはこのプロジェクトへの関心を深める

5、プロジェクト学習基本フェーズで『地域創生コンピテンシー』修得

プロジェクト学習のフェーズ（共通プラットフォーム）で進めます。

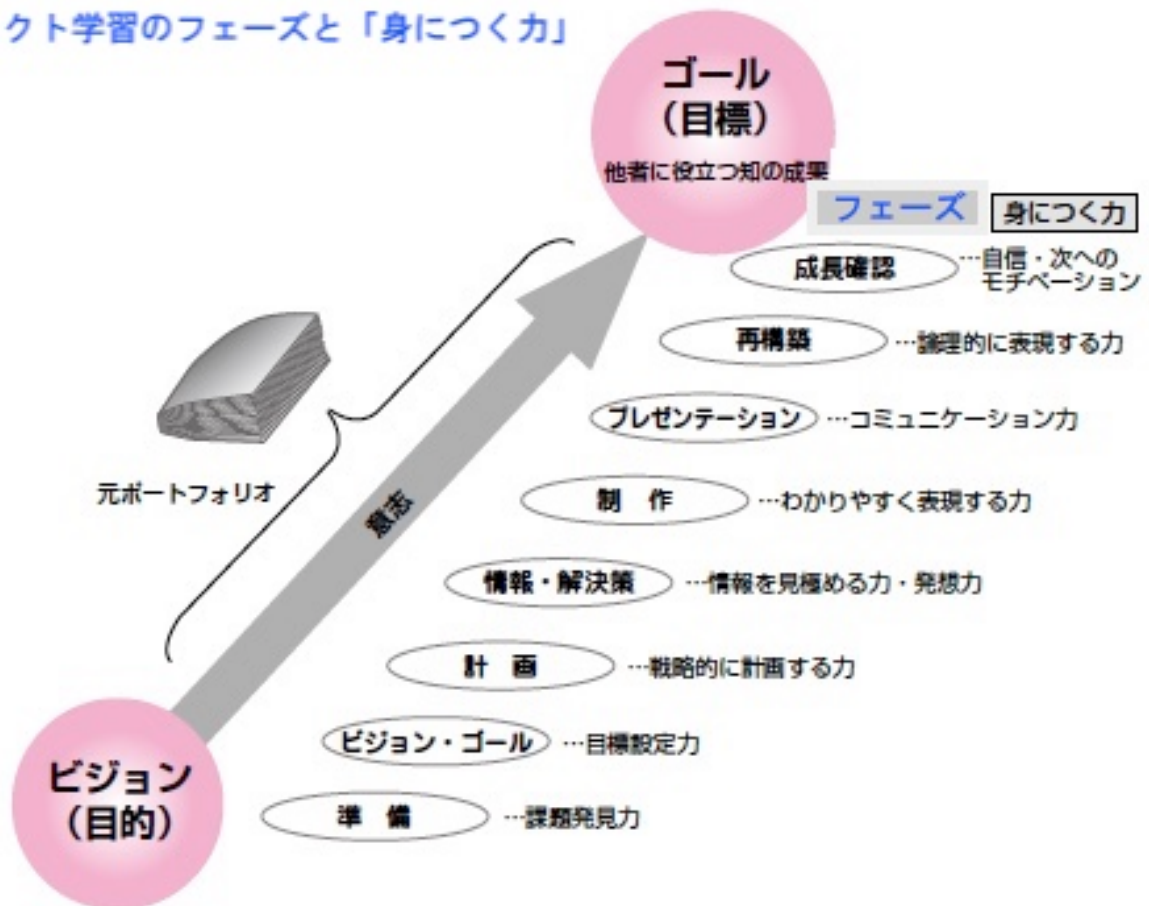
フェーズは、プロジェクトを進める上でのマイルストーンとなります。

ゴールへ向かうフェーズでプロジェクト力＝『地域創生コンピテンシー』を修得することを果たします。

プロジェクト学習は8つのフェーズからなり、それぞれに身につく力が異なります。

[準備]のフェーズでは「課題発見力」を、[ビジョン・ゴール]では「目標設定力」を、[計画]では「すべきことを考え出せる力」を、[情報・解決策]では、臨機応変に状況対応しつつ情報を得て課題解決アイデアを生み出す力を、[制作]では課題解決のビジュアル表現力を、[プレゼンテーション]では知の共有の仕方を、[再構築]では論理的な表現力を、[成長確認]では経験をふり振り返り成長した自分を自覚します。

プロジェクト学習のフェーズと「身につく力」



【地域創生コンピテンシー】 ～ プロジェクト学習のフェーズごとに「身につく力」 ～

- phase1 [準備]
 - 目の前の現実と対座する力
 - ビジョンを描く力
 - 課題発見力・気づく力
 - チャレンジ力
- phase2 [ビジョン・ゴール]
 - 明確なゴール（目標）設定力
 - 現実に主体的にかかわる力
 - チームビルディングの理解
 - 個性を活かしたチームワーク力 他
- phase3 [計画]
 - 戦略的に計画する力（すべきこと、会うべき人、手順など）
 - 目標のために必要な情報を予測できる力
 - 優先すべきことを決定できる力（プライオリティー）
 - 時間管理能力 他
- phase4 [情報・解決策]
 - 現場で真実を掴む、という価値観
 - 根拠ある情報・最新のデータ獲得を厭わず求める意志
 - リフレーミング力
 - 交渉力
 - グローバル思考
 - データサイエンス力
 - 現場を捉え、適切な判断ができる力
 - 課題解決力(□分析力 □対応力 □発想力) 他
- phase5 [制作]
 - 論理的思考力
 - 構想力
 - 思考をデザイン的に表現する力
 - 簡潔な表現力（言語、文章）
 - 概念をビジュアルで表現する力 他
- phase6 [プレゼンテーション]
 - オンラインによるプレゼンテーション力
 - 当事者（個人、少数）へのプレゼンテーション力
 - 市民など多数の関わりを持つ人々へのプレゼンテーション力
 - 誠実、信頼を軸とするコミュニケーション力
 - 確かな根拠をもとに説明できる力
 - 評価を次へ活かせる謙虚さ 他
- phase7 [再構築]
 - 俯瞰する力
 - 論理的に表現する力
 - 普遍的表現力（文章能力） 他
- phase8 [成長確認]
 - 自己評価力
 - 相互評価力
 - 次へのモチベーションへ未来志向力 他

【地域創生コンピテンシー】とは

プロジェクト学習のフェーズごとに身につく力は、知識やスキルではなく、ビジョン力、課題発見力、課題解決力、目標設定力、チームビルディング力、戦略的な工程を作成する力、考えの異なる人と同じ目標達成を叶える力、交渉力など...それは単発的な能力ではなく、目の前の現実の中で発揮できる能力や知性、情熱、人格的な表れ、それら包括的な力＝「地域創生コンピテンシー」と言えます。

プロジェクト学習で身につく「地域創生コンピテンシー」には次のような様々な能力やセンスからなります、その修得のスピードや視点は、定型的、均一的であることを求めません。フェーズの活動をスタートする前に、自分はどの力をどう身につけたいのか、自分なりの資質や感性と照らし合わせて考えます。基本的な姿勢としては、「この能力は自分には要らない、無しでいい」というものはありません。避けるのではなく、どう自分らしく修得するかを自らの意志で考えることが重要です。

【地域創生コンピテンシーの修得知＝「Gリスト」】

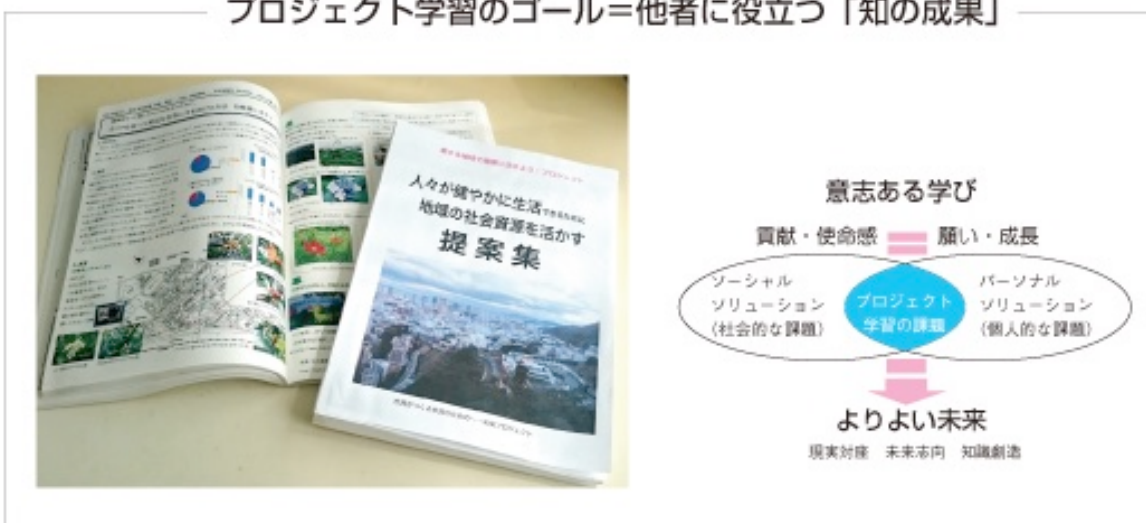
Gリスト：成長する（**grow up**）ためのリストの意味、「地域創生プロジェクト」に参加することで修得することができるコンピテンシー群。Gリストは、学生へも当初から公開されている

G（**grow up**）リストが明確に存在することは、「地域創生プロジェクト」に参加する動機そのものとなる

6、成長戦略ツールとしての「ポートフォリオ」 3 ページ参照

ゴールへ向かうプロセスで手に入れた情報や活動などを「元ポートフォリオ」へ入れていきます。最後に元ポートフォリオを再構築して「凝縮ポートフォリオ」を創造的にうみあげます。

プロジェクト学習のゴール＝他者に役立つ「知の成果」



● 大学／指導者—ポートフォリオで「対話コーチング」

地域創生プロジェクトは「学校の中」だけで進行するものではなく、そのステージは地域社会ですの

で
大学サイドは学生たちの知的活動をみることはできません。ここにポートフォリオがあれば、そんな情報を手に入れ、そのために事前にどんな機転を利かせたのか、どう判断し、行動したのか、どんな人々と一緒に現場へ行ったのかなどを知ることができます。

適切な対話コーチングやアドバイスにより「地域創生コンピテンシー」が高まります。

● 地域の人々や学生同士—ポートフォリオで「知の共有」

創造的な思考ができるためには、他者との「知の触発」「知の共有」が欠かせません。

また自分のものの見方を知る、俯瞰する、そのためにも、他者との対話や意見交換が欠かせません。ここにポートフォリオを互いに見せ合うことが大変に有効です。例えば同じものを見ても、一人ひとりの物事のとらえ方があることを実感できます。



互いにポートフォリオを見せ合い、
自分の考えを伝えている学生たち。

7、新評価(1) — 社会からの評価で成長する

プロジェクト学習の知の成果＝「凝縮ポートフォリオ」は、提案集や地域活性化実行計画書など、よき未来へ貢献するもの、基本的に、「他者に役立つ知の成果物」とすることが重要です。それは、承認、やりがい、自己有用感につながるだけでなく、学校の中からは決して得られない、厳しい社会の受け止め方や様々な関わりを持つ様々な当事者からの異なる見解からなる評価は、限られた価値観からなる校内評価では決して得られない悶々とした思いを学生たちへ与えます、目の前の現実と対座する、これが正解！というものがないプロジェクト学習が持つ複雑さが次への思考を学習者にもたらし

ます。
「公的評価」こそが成長への価値を持ちます。

8、新評価(2) — ポートフォリオでエビデンス評価

プロジェクトを進めればいい、ということが最優先ではありません。プロジェクト学習の手法で展開していくプロセスで、そこに関わる学生、地域の人々が成長することがねらいです。その成長を保証するものとしてポートフォリオを生かします。

フェーズごとの身につく力が身についたか、をポートフォリオで実際、こんなふうに行ったんだよ、とその時の状況を確かに語り、示すことができます。評価者は、確かにこうやったんだと根拠を元に確認することができます。ルーブリックの項目ともなります。

9、新評価(3) — 単位・修得の課題を解決する

G (*grow up*) リストは、確実に成長するためのラダーとしての役割を持ちます。ポートフォリオを生かした評価を行うことで、大学サイドは、個々の学生に対し実際に、このコンピテンシーの行為や活動を確認できるので、単位・修得を保証することができます。

(詳しくは、「AI時代の教育と評価」参照)

就活などで、地域創生プロジェクトの全フェーズ(活動)に参加することが不可能な状況があります。しかし次世代プロジェクト学習では、フェーズごとの身につく力＝ G (*grow up*) リストが明確に存在するのでその修得に関して全体調整ができる。

<例> 「計画」のフェーズに都合で参加できなくとも、ほかのフェーズで、有効な活動や働きをしていれば全体加算となる

10、新評価(4) — 経験の価値化／キャリアデザイン・ビジョン

プロジェクト学習の最後、学生たちは、同じ船のプロジェクトメンバーから未来へのエールや資質発見などをもらいます。それは、キャリアビジョンを描く時に役立ちます。

能力のエビデンス

プロジェクト学習の成果物＝〇〇実行計画書 作成などは、参加した学生にとって、キャリアを示すものになります。就活、面接に大いに活きます。

11、新評価(5) — 随時 共有と評価

地域再生プロジェクトにおいては、その進行プロセスを随時、全体で共有します。

最後に公開プレゼンテーションのステージを設けより広域的な視点で各プロジェクトの成果だけでなく、そこに至る戦略的な思考、判断、行動などを共有しつつ進行します。

そこでの評価も互いに活かし、次の成長へのモチベーションとなります。